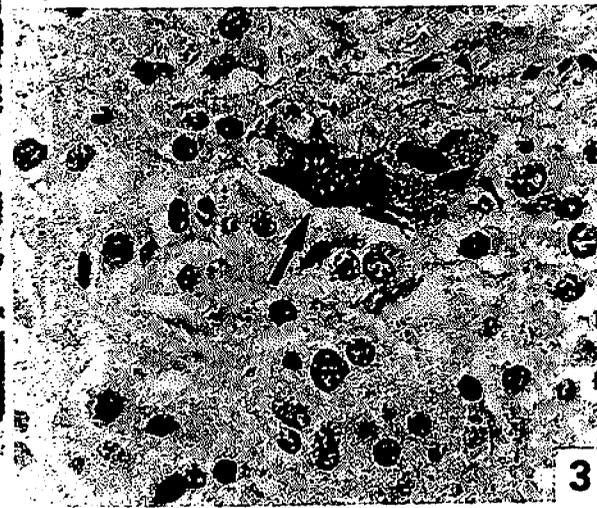
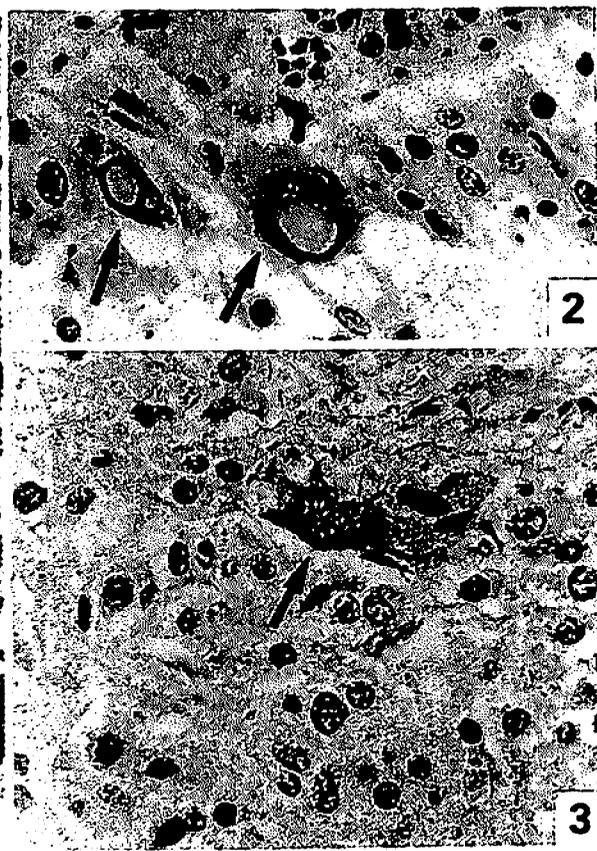
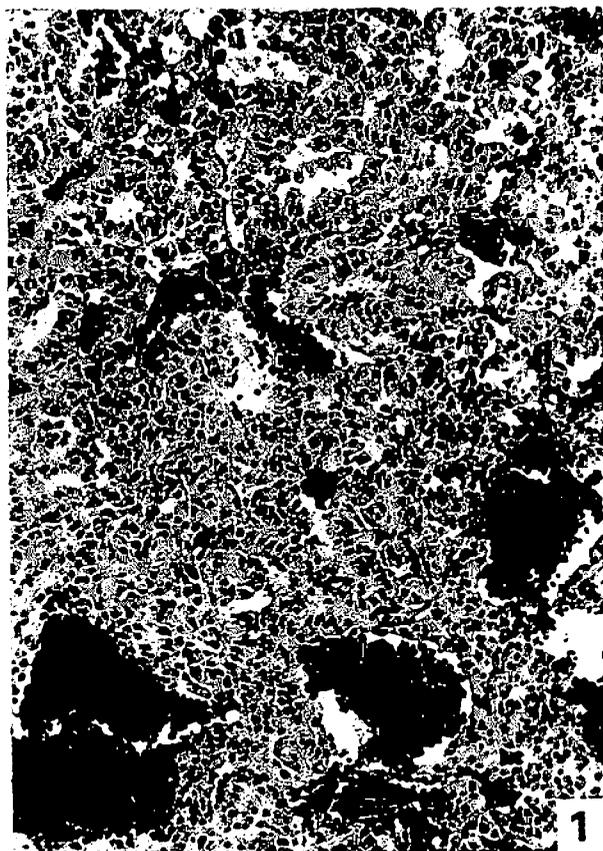


馬の下垂体腫瘍

家畜衛生試験場北海道支場出題 第22回獣医病理学研修会標本No.378



動物：ウマ，ベルシュロン種，去勢雄，15歳。

臨床的事項：患者は北海道産の実験馬として家畜試北海道支場に導入された。導入より死亡までの5ヵ月間にしばしば原因不明の発汗，呼吸促迫を呈した。

肉眼所見：外観上，著しく伸長した被毛が特徴的で，これは導入時にすでに観察されていた。下垂体は著しく腫大(34.5g)し暗赤色。剖面はうっ血が強く髄様。左副腎の血腫状腫大。甲状腺は軽度に腫大(22.9g, 11.9g)。前腸間膜動脈，回結腸動脈などの寄生性動脈瘤および血栓形成。回腸下部のびまん性出血，大結腸部の出血および貧血性梗塞。血様腹水の少量貯溜。

組織学的所見：下垂体腫瘍は腺性下垂体中間部に生じ，そのため同主部は圧迫され，薄いリム状になっていた。腫瘍構成細胞は一般に多角形で，エオジンに淡染するやや顆粒状の細胞質と，1~2個の核小体を有する淡明な楕円形の核を持っていた。これらは繊細な線維性中隔により小~中等大に区画されて不整腺管状ないしシート状に配列し，コロイドを有する小汙胞形成部も認められた(図1，H-E染色，×120)。このような構成細胞のほか，時折大型の腫瘍細胞が散在していた(図2，H-E染色，×480)。この細胞の特徴は核が著しく大きく，しばしば

核内封入体を形成しており(図2，矢印)その一部はPAS陽性顆粒状であった(図3，PAS染色，×480)。腫瘍細胞はアルデヒドフクシン・マッソングールドナー染色で証明される細胞質内顆粒を有さず，分裂像も認められなかった。大脳では，視床下部の神経核の一部に神経細胞の変性，萎縮が認められた外に著変を認めなかった。副腎には左右とも球状帯~束状帯の軽度肥厚と変性，細胞解離が認められた。左副腎皮質深部には著しい出血と血腫形成が認められた。腸間膜動脈の変化は寄生虫性血栓であり，腸管の変化はそれに関係した出血ないし梗塞であった。甲状腺に著変は認められなかった。

病理学的診断：本腫瘍は腫瘍細胞の形態と配列，ならびに存在部位から，腺性下垂体中間部の腺腫 Adenoma of the Pars Intermediaと診断された。患馬の長毛化の原因として，文献に述べられている程強くはないが，視床下部の神経核の変化が，季節的換毛機能障害との関係で疑われた。副腎の出血については文献的にACTHとの関係が知られているが，本例では皮質の萎縮は認められなく，原因の特定化はできなかった。この型の下垂体腫瘍は去勢された老馬に多いというが，比較的希な腫瘍と思われた。